

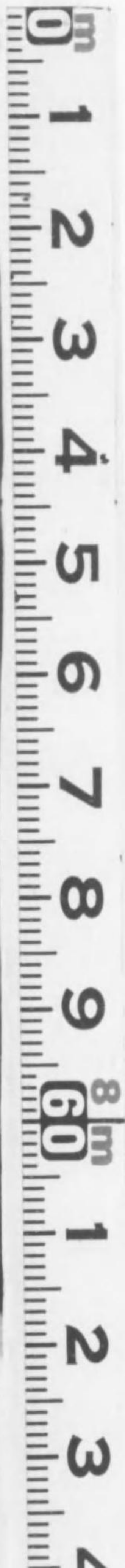
忠臣藏銘々傳
全

特60

特60-106



1200800258618



始



No 5966/23 特60 106

忠臣蔵



大石主税良兼 行年十六才
 良兼ハ良雄ガ嫡男ホリ身ノ大
 五尺八寸カ量衆小勝ミたり打入
 の夜捕手大将トありて功を顕せ

金壽堂版

忠臣蔵銘々傳



一覺振
劍與竹
林矢頭
等奮戰





大石主税良兼
 吉田左門兼亮
 堀部弥兵衛丸
 同安兵卫常
 神崎與五郎則休
 片岡源吾高房
 武林唯七隆重
 千世郎兵衛光忠

高十五百石
 大石藏介良雄
 行年四十五才



萬山不
 重君恩
 重一髮
 不輕一
 命輕

良雄は播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩の家臣
 大石頼母の子あり母は長矩殿の父長重殿の妹也
 主家大愛の後千辛万苦して終に復讐の本懐を達せ

命輕



良雄ハ播州赤穂の城主淺野内匠頭長矩の家臣
大石頼母ガ子ナリ母ハ長矩殿の父長重殿の妹也
主家大愛の後千辛万苦して終ハ復讐の本懐を達ス

高十五石
大石藏介良雄
行年四十五才

大石主税良兼

吉原左衛門兼亮

堀部弥兵衛左丸

同安兵衛武常

神崎與五郎則休

片岡源吾高房

武林唯七隆重

千葉前左光忠



大序



吉田忠左門 兼亮
原元辰と盟士の取締
討入の夜摺手の大
將とあり良兼を輔けて指揮を
高五郎
行年 六十五才

時津風枝をあらさぬ君が代も
茂りて暗き星月夜鑑倉山の繁
栄八国お羽をのす鶴ヶ岡八幡宮
の神前へ足利直義未詣る折柄
先頃亡びたる新田義貞戦場ふ
着捨し兜鑑定の役ふ召まじ
塩谷と妻顔世御前の色色好
色あき高野師直人あき折おろ
くしとむむを見兼て桃井が
隔し意恨ふ罵詈せしより既ふ
斯よと見へたりしが遠御の觸ふ
是非あくも無念をこらへて止りぬ



二段目



岡島八十右三門常樹
常樹八元来猛烈の士なり王家の
とき大野九郎兵衛の非を
罵りたれ

たり後吉良家の
仲間部屋を取
入り

諸侯争臣五人つれは無道といへども其国を不失とその金言信あるか桃井若秋之助安國ハ執權高野師直を鶴ヶ岡での雑言をいふと此由家老本藏へ密かか語りて後々の支共万事言聞る本藏主人の止かきを了りて即坐ふ一刀借受てまづこの通りおあし王へと庭の松を枝切捨て主人の心を晴しかき其夜ひそか金銀を多く送りて師直へ主人の無事を頼入ぬ



浪人の後江戸芝の辺
伯父の家を寓居し
吉良家の探偵を遣は
し



三段目



赤坂正辰 高百石 行年三十五才

柔骨を制するに欲み眼も暗
 き夜をやりかぎや黄金の賄賂
 心願きて若狭之助の昨日の詫せえ
 もり早朝より出仕を松の長廊
 下一徹短慮の桃井ハ今日ぞ師
 直真ニツと怒りを合む長袴登
 さわりも荒々しく来るを夫と帯
 たる刀投出詔入是非を與へ入る
 跡に相手替りて塩谷判官退刻を
 詫て差出申妻の拙き歌の点作見る
 より師直我が意の叶はぬ更と高貞
 を罵りけるより刃傷なむみぬ



伏見にて大野
 貞九郎の遺ひ
 けれは其妻を
 責て
 中村勘助正辰 高百石 行年三十五才
 正辰赤坂を去る
 下る



三段目
うら



間瀬孫九郎
正辰
都住
行年
才

久末...
み...
七の後...
本望を...

互ふ動も...
の関の...
夫と岩橋...
ぬを...
心は...
先...
中を...
声...
南無三...
か...
せん...
止...



望...
て...
へ...
或...
女の...
門...
恐...
賜...
聞...
正...
行...
才



四段目



村松大夫高直 拜年二十七日
隆円 浪人して 医とあり 高直公の長
子あり 或日 刀屋 研の注文を
置
た
知
り
出
来
せ
り
の
試
見
ん
と
て
店
先
の
柱
を
主
人
に
請
ひ
抜
打
せ
り
か
バ
あ
は
ま
ま
切
こ
も
と
り
と
ぞ

管中が傷難禁の掟を知らぬも
ねども堪忍にあぬ悪言不武門の一分
立かゝ祖先不傳なる家を抛つ覚悟
の塩谷判官身は幽閑の癖々とも閉
る長家門部の中へ寂美と物音もなき
表より上使の御入と声高くきつ
入来も右堂薬師寺上座へ通き塩谷高
貞処分を待の長羽織常不替り風俗
を薬師寺見谷の朝礼判官莞尔と微笑
か一衣服を脱却腹と兼て用意の白小
袖水上下を着用一作法乱れ切腹一
最期の際小大星無念の短刀譲り
與へぬ



浅野家の近習役を勤
わが退去の後ち老母ハ治房の志を察して
自投せりかば討入の夜ハ母の志を空くせとて
擡んで後群の働きをさし功を顕したりとぞ

五段目



問 善兵衛元兵衛
流 六十九石
の 鎗の達人
の 後或も郎の

品もあき生よき
たりと思ひし今徒
得たる老の栗一さとり

一のつじとゆうらちゆ夫やとよ
篠突く如き夕立小子故の暗小興一兵
衛 賢助平小忠義をいさせん娘
が身を祇園町ある一カへ賣と約する
五金懐中かてとほく戻る跡
より追掛て無慈悲小殺を定九郎黄
金奪ふて悦ぶ処へ狂い走來る手負
猪是れと驚く胸元へ筒音高く飛
來る鏝丸思の報ひ速く小血を吐き
倒る其処へ火繩吹き消し勤平ハ
仕済たりと捺り倚り様子を
見れば此如何小猪か何ぞ旅人故
善兵衛と懐差入手先至而舌與懐



問 善兵衛元兵衛
住

十三

目黒の
を果して
得たり

かみ 五段目



目段六



堀部 兵衛 彌次郎
此の 人幼小
伯父の 敵を討ち中
小主人の 敵を討ち
高田の 馬場
奇と 詭計
堀部 兵衛 彌次郎
武庫
堀部 兵衛 彌次郎

爰ちや一カの主入の智籠引
連て兵工が門音信つて父小約せ
おかるを連戻らんと云けるふおなる
親子の不審顔相談つて夫を木の
身分不致さんと頼ふ親人も未だ戻
り来ぬ其上小夫へ逢て暇をいふを
主の才共六其親人あら今の先身の
代の金受取て止ても止らざ戻らる
其折衣類の切端小てまつり置き
たる財布までやりが懐か証扱
又夫小遂近き祇園町ゆゑ何
時小くも逢わること連行する



小野寺 孝右衛門
未だ 御座は行はせ
十内秀和の養子
とあり一より未だ二十日も立ぬ
内小主家滅亡小及ぶまこれども志
金鉄の如く小して動かば遂小主人の仇
を討ち天晴誠忠の士と謂ふべきかり

七段目

浮き河竹の苦界をバ勤めて漸
年明けて出で夫や兩親小相
逢ふこのみ衆一こ小面笑ひ
心ろでハ涕て明けれ暮せし
今日ハ馴染の大尺が強て進めし
其の酒の酔さきまさんと二階の手摺
小もたれつ風小吹かれて居た
りける斯くと、知らで大星ハ兼て
力弥が持参せし密書見やと一
間を立出で酔一振して讀居たり
おなるが落せし筈南無三事を損せ
しと思ふものなら身交せん直相



原總右門元辰 高三百石
行年五十二才
元辰ハ主家滅亡の際曾て大義小與せん
とる時其母儀を察しそ自殺
あり依て一層志を△
此入月の目利を能たりと云ふ誠忠の士也



神吉與五郎則休
高百三行年五十
則休幼名大千代
云ふ 十三才の時從弟の仇
を即 坐討年あり
主 家大變の
後町人小身を奪し吉良家
小入込郎中の模様を伺ひ

七段目

おかるハ嬉
うら



七段目

浮き河竹の苦界をバ勤めて漸
 年明けて出で夫や西親小相
 逢ふことのみ禁一こ小面ハ笑ひ
 心ろでハ涕て明けれ暮せし
 今日ハ馴染の大尺ガ強て進めし
 其の酒の酔さまさん二階の手摺
 小もたれつ風小吹かれて居た
 りける斯くとい知らで大星ハ兼て
 カ弥ガ持参せし密書見をよと一
 間を立出で酔一振して讀居たり
 おかろ落せし并小南無三事を損せ
 しと思ふものなり身受せんとい相



原總右門元辰 高三百石
 行年五十二
 元辰ハ主家滅亡の際曾て大義小與せん
 せる時其母儀を察しそ自殺
 あり依て一層忠義
 此人の目利を能たりといふ誠忠の士也

七段目



おかしき嬉しきいとせめて一
 筆親里へ知らせんものと硯引寄
 せ書かける後小寺岡平右門妹
 勤の様子をバ尋んものと顔見合
 互小夫と驚きつかなかし我家の大衆
 を知ら種々尋る小寺岡包小はか
 けもバ父と夫が横死より母病死の
 事迄を語るおかし打歎き絶え入り
 小有けるを寺岡論して言けるハ御書
 の密書を見上ハ我小命與へと言
 を大星押止め持た双を其俣小床下
 して突けれ九太夫ハ血小染死たり



神奇與五郎則休
 高百三行年三十五
 則休幼名大千代
 云ふ 十三才の時従弟の九
 を即 坐小討た年あり
 主 家大愛の
 後町人小身を奪い吉良家
 小入込邸中の様様を伺い
 本高源吾忠雄 高千五百石
 行年三十五
 忠雄 俳句を能 俳名を子葉
 云ふ 世角と交り 深し其秀吟

六段目



磯貝半蔵五郎正友 高百五十五
正之と申す時辰在りて其門止りて已不
別れんことを片岡源五郎門止りて
大石小次郎 加門
木懐
り遠大

道を急いで早野勘平とつり戻る
我家の門駕籠ふ衆たる女房の様
子不審と尋ねられ箇様と我上
思ふて身賣の頼末聞て驚く財布
の端から若や夫ハハハぬかと思案の
胸元とつをひり涙ふくろ女房か
別と苦う立出る跡へ仲間の獵入
がややと昇来るよ一兵衛の死かい
見るより老母の歎き側に見兼て物
平の立脚落も財布を見何故男を
殺せと責問ふ妻へ原十崎非義を責
れハ腹切て言訳をもぞ哀まあり



備前岡山の町人茶屋五郎兵衛の次男
あつたが幼年より武勇を
好み日々武藝を
習はせしむる
二月十日朝八時出立
百十里を四日半に達して
第一番注進せしむる

早水 藤右 門 滝亮 高百 平石 早

八段目



村松 喜兵衛 直秀
 秀直 六下郎の留守居
 役をつとめたり一浪人の
 後ち医を業としたり△
 山崎の春の夕暮

飛鳥川 昨日の淵八瀬と替り浅きも
 深き如古川の娘小浪ハ父よりの免
 を受て母と共幼きよりの言あつけ
 思ひ積ち山科の力你が方へ嫁入
 も未た何とけなきはほふ氣不救
 家と跡不突杖も双六の外踏も見
 ぬ五十三次の駅路を日毎に替る
 板枕葛の細道をや越えよとこが
 る人ふ大井川ゆひく近江の
 八たはくうせし旅の即もつも
 り山科へこそ着ける衣衣服改
 め大星の邸へ尋ね到りける



江州前原の産
 の臣玉虫十右エ
 場を去らず敵
 へて早速不
 召抱へられ
 たり後
 衆と
 死を
 共
 きみ

ふり曾て錦衣を遊び一時浅野家
 門不慮に殺害せられしを伊助の
 忠告なり此の由内匠殿に玉

前原 伊助
 東房
 忠臣蔵



九段目

風雅でもなく洒落でもなく浮世の
 かごと他住居身を持ち崩し天星
 が留守をたづろ妻を石通々来る嫁
 小浪の母の居せ接對も昔を捨ぬ折目
 高姑女去の言み取付次も本々小浪
 母の居せも夫も預る引手腰押取娘
 覚悟と立上る表も出せ尺八の曲さへ
 鶴の樂籠り子焼野雉子夜の鶴子
 思身の恩愛百双も本々親貞
 すと右御無用と言つて出て祝言を
 魚も子悦ぶ如吉川の母と娘一本藏の
 良首を響引手申受人と言料り

忠目集



三

助武大兵ふて身文六尺余ふり
 赤垣と共小東都下り江戸の
 とふり遊
 典不事寄
 せ敵
 の
 静
 たりとぞ

忠目集



目段十



義氣を思えて大星の頼を受け引何
 くれと夜討の用具調へるも他脚を
 もらふ女房の花園を離別も仇討
 り最り程近き塚の町人器量見上る
 天川屋義孝とよぶ名も唾をちぞ
 速れ動ぬ義孝の魂ひ夫と知れど
 大星が猶も心を探らん義孝の人々
 捕手と御用とく踏込でまき
 試みるもこれ頼の用具を入置
 其長持(腰打掛)も変ぬ大大夫
 子流石の大星警まで離別の妻が
 黒髪を切つ納める一丈両計



政行若冠の頃天少年あり
 受けて家出居たり然るも主家大變の時
 早も脚及びて金子
 本大石に
 之丞政行
 高百五十石
 行年三十七



目段一十



降きく雪も白銀へ近々轉居の高野
師直や用心も薄らひで令宵名残
の茶の會ふまも客も與入る雪乃
景色も夜も更へ新の嵐ふくと鐘さへ
渡る丑満の時を遠へ打出は太鼓の音
と諸共表裏の門を破り一時不込
入義士の面々得ものも押取
切立突立進行を防がんものと師
直頼切たる小林平八清水一学立
出て手張きつゝる義士の徒も大勢
相手も目覚しき働きあせど名不
しつふ多人数ゆゑ不討まける





十二段目 大尾



先祖ハ明國の副郎官武林隆あり朝舞陣の時
吉野東ニ捕され帰伏して臣とある唯七八其
標あり性質勇猛ふして

夫善果悪報何れも逃まん流石とき
ゆく執権の高武藏守師直も去年營
中々より君の御気色何とあつて
きみ勤士も成り堆く願やて今ハ隱居
の身世もつる時の賄路もて家も富
貴もつりあがり塩谷浪士の復讐を
恐まて他出も成り堆く我家も催
ま茶の湯さ終る間もあき夜討
の騒動驚き恐まて比與も狭道
よりして炭部屋へ隠き思ふも義士
の人々探来あして首を揚げ勇も雲
と炭部屋も是白黒を分あらん



討入の夜

明治廿三年九月三音印刷
全一 年十月一日出版
海軍区南元町十五番地
書籍刊行所 牧金之助

終

